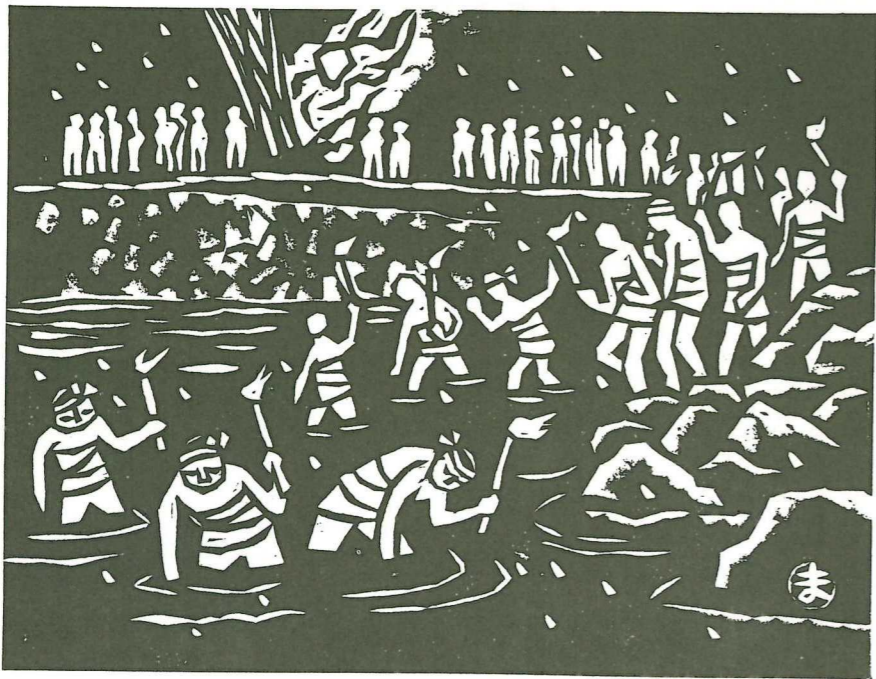


北九州市の文化財を守る会

会報

No. 62 63. 2. 1

発行 北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区鍛冶町一丁目7-2
森 嶋 外 旧 居 内
電話 (093) 531-1604
振替口座番号 福岡 3 9 3
印刷 吉田印刷株式会社
北九州市若松区浜町一丁目19-1
電話 761-5 4 2 4



脇之浦はだか祭

片山正信氏の「版画若松百景」より

テレビの除夜の鐘が終ると、早や歳改まり、正月は諸行事が多い。
初日の出は風師、血倉、高塔山が多く、登山者を集め、初日がパツと射すと、その感動は若人の間に万歳の声となる。
三ヶ日を中心に三社詣りのバスが多数出され、新年の幸を願うと共に受験合格祈願も多い、共にその幸を祈った。
三日は宮崎八幡の「玉せせり」である。寒中裸形の若人達が玉を競り合い、飛ぶ勢水の飛沫が輝き、若人の膚から湯気があがる勇壮な行事である。
七日夜は太宰府の「鬼すべ」と、久留米玉垂神社の「鬼会火祭」が同時に行われ、共に鬼を追出す行事である。
何故か「鬼すべ」文が報道され、「鬼会」はされないが、玉垂神社の火祭は鞍馬や那智と共に日本の三大火祭と言っても良い豪華華麗なものである。
十米余のもうそう青竹を縄で束ね、切口は杉の葉をつめて径一米余の大たいまつが七本持寄られる。一本に五、六〇人の若者の持つ檜の木の大たいまつが七本持寄られる。一本に五、六〇人の若者の持つ檜の木の大たいまつが七本持寄られる。一本に五、六〇人の若者の持つ檜の木の大たいまつが七本持寄られる。
...

新春雑感

去年十二月六日、若松区の郷土史研究会の二周年記念特別講演会で梅光女子大の岡野信子先生(元若高の先生)の「北九州の方言―島郷の方言を主とした」という講演を拝聴して大変有意義であった。
話の中に第二集「続島郷の史跡と伝説」中の方言にもふれられた。
若松の安屋では「胡座をかく」ということを「ひざぶたをくむ」というとか音声面の現象の例として「おぼれよった」を「うぶえよった」「早い」を「はえー」「強い」を「つえー」「たいていわかっていまずよ」は「たいがいわかっていまずよ」というとか「嫁見」のことを「うしみ」というとか、その他、身近かな話で皆な熱心に聴いていた。質問も多かった。

質問第一号、島郷ではお葬式に行くことを「骨かみに行く」といいます。山口県の方にも、そういう所があるようですが、それはどうしてでしょうか？それに関連して「大食」葬式という忌詞がある。「丑の日に大根を蒔くと大食がある」という。「かてきり」という質問があった。婿の両親、嫁の両親がそれぞれの両家にまねかれることをいう。「家庭ちぎり」が訛ったのだろうという人もいた。懇親会の席でも島郷方言の集収を依頼されたり集収の方法等も話して貰った。私達はこれを機会に心を新たに、再度島郷方言の集収に取り組むことにしている。

眼鏡雑感

若松区 光 安 鐵 男

メガネは何時頃作られたものだろうか？それは西暦一三〇〇年以降、イタリアの硝子工業が大へん盛んだったベネチアでレンズに使用出来る程透明な斑のないものが出来始めたからである。と手元の眼鏡誌に記されています。

それより先、英国ではオックスフォード、フランチエスカ派の僧正、ロジャース・パーコン(一二一四〜一二九四年)が「硝子球片は、老人及び視力の弱い眼の持主にとつて、甚だ適当な機械である」と記しています。パーコンは、宗教、哲学、物理に精通した驚異的な博士で、英国では此の人を以って眼鏡の始祖としているようです。彼の研究は、今日のカメラ、望遠鏡、顕微鏡にまで論及している程です。

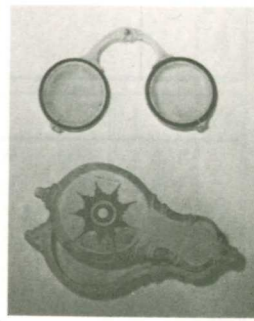
私は一九六九年ソ連領、シルクロードの旅行をしました。内陸深く遺跡を訪ねる旅でしたが人里を何百キロも離れた奥地でも時折、メガネを掛けた人に出合います。それはソ連政府から支給されたメ

を依頼されたり集収の方法等も話して貰った。私達はこれを機会に心を新たに、再度島郷方言の集収に取り組むことにしている。

ガネ(当時ソ連はメガネは配給制で、市民は個人個人に合ったサイズで統一されたデザインのパレームを掛けていました。)ではなく何十年も使用の古い型のメガネです。フレームには何回も修理をした跡が見られます。器用な村人が居るのか、貴重なメガネを大切に大切に補修して使う、そこに私は彼等の文化を見る思いでした。

私は古いメガネを蒐集しておりますが、集まった一本一本は色々な事を語ります。その歴史を考えてみますと、初めはやはり単眼で拡大鏡からだと思えます。柄付の単眼鏡は二個合わされて手持眼鏡となり、鼻眼鏡のようなものから幾多の変遷の後、現在の形になっていった事がよく解ります。

今日、我が国に現存する最古のもの、京都紫野大徳寺、大仙院所蔵の、足利十二代將軍義晴の使用したメガネです。象牙製、瓢箪形、クサビ付の開閉出来る容器の中に収められ、枠径二・五センチ位の重ねて折たためる型の鼻眼



鏡、いわゆる中国の鑿鑿(あいたい)と呼ばれるメガネです。足利義晴所持のものとするれば、十五世紀の間に当り、南蛮渡来以前に遡ることになり、中国伝来と考証されていますが、私は、そのケースの模様を見る時、さらに遠いイスラム文化の雰囲気を感じるのです。日本にメガネが渡来した当初は、おそらく南蛮文化の一つとして物珍らしく、貴重な品であったに、ちがひありません。日本人は輸入された文化を受容して、更にこれを消化して、自分のものにする能力に長けているといわれますが、我が国の古いメガネがこの事をよく証明しております。

私は昨年、中国の桂林で、ピンヤンジェンと呼ばれるメガネを手に入れました。清朝を代表するメガネ、中国の古いメガネを手にして、その文化と歴史を考える時、メガネが出来て、たかだか七〇〇年としているのは、あまりにも短いような気がしています。

編集後記

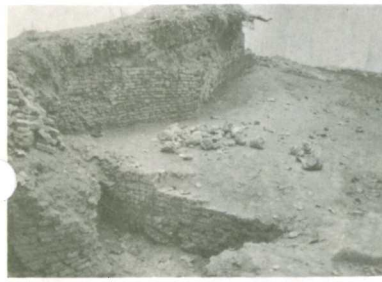
◇会報第六十二号をお届けします。担当は若松支部でした。次号は五月に事務局担当です。◇年度末も近く、会員名簿整備の都合上転居、電話変更、会費納入等は事務局にご連絡下さい。◇本紙紙面は会員皆様の発表の場です。ご寄稿を歓迎いたします。◇向寒の候お身ご自愛願います。

硯石探訪の旅

若松区 古賀 豊子

三年前の年末を控えた或日の事、突然「中国に行きませんか」という誘いがかった。その年の春、夫に先立たれ今度の正月は一人で淋しいがどう過そうかと落ちこんでいた私は即座に行きますと返事をしてしまった。よくよく聞いてみると「日中文房愛好会友好訪中団」団長相浦紫瑞先生という事にびっくり、私などその筋においては無智文盲もよいと、まるっきりの素人、それに団長先生は硯の研究においては日本で第一人者といわれている高名な方で足許にも近寄り難い存在です。何か場違いのところへ一人とび込む様で恐ろしくなり余程おことわりしようかと思いましたが、そこは持ち前の横着さと気楽さから「えーまあよ六十五歳の巨体だけ小さくなって一番後からついて行けば何とかなるのでは？」それに今まで書をやり乍ら何も知らなかった硯の事も少しは勉強出来るのではと思ひ直し意を決してついて行くことにしました。

十二月二十八日 長崎より上海へ。ここは通過地点なのであまり時間がなく骨董屋一軒だけ。そこで私は小振りながら箱の丸みが何とも言えず美しい形の硯を見つけ



明窯跡

た。石の事はまるつきりわからないので、早速団長におそろのおそろのお伺いを立てたところ「之はいいものを見つけたね、買っておいの方がいいですよ」と言われ財布の紐をいましてしまいました。その晩、夜行列車にて南下。

二十九日 南昌。ここは江西省の省都、明代の書画家として有名な八大山人の記念館を見学、文物店巡りをし江西賓館にて一泊。

三十日 南昌よりバスで九十里東北の景德鎮へ。ここは有名な焼物の里、普通では見せて貰えない官窯跡（明窯・宗窯）を見学し監視人の目を盗んで当時の破片をポケットに拾いました。街路では磁器の原料の白い粉を詰めた袋を山積みにした大八車が沢山往來して



磁器の原料を運んでいる

るのが印象的でした。

三十一日 景德鎮よりバスで五十里東北の婺源へ。ここは端溪硯と双壁と言われる歙州硯の産地、芙蓉溪のあるところ、ここも未解放地区乍ら団長よりたつての依頼にて前もって手続をし許可がおりていました。しかし残念な事に雪崩のため道が閉鎖されていて採石現場へは行かれませんでしたが作硯工場はゆっくり見学させてもらった。この採石は端溪よりも歴史が古く坑も有名な羅紋坑、眉子坑、龍眉坑等々沢山ある。石は端溪に比べて色も黒く石質も硬い。中でも金量や金星などの文様がキラキラ輝いているのは寶石を見ていよう。非売品のケースの中には日本では見たこともないような立派な硯に目を奪われて立ち去り難い思いでした。又バスで景德鎮へ。途中休憩した部落では結婚式があり、その御馳走を食べさせて



高山坑の入口(下部黒い所)



田黄を探している

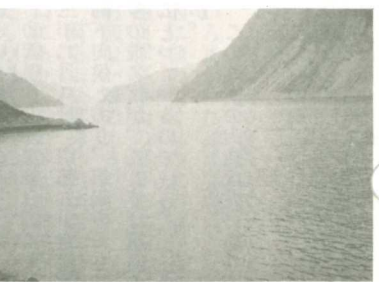
もらい大感激でした。

一月一日 お正月は零下五度の景德鎮でむかえました。中国は旧正月なので当地では何もない淋しい新年でした。全員風邪を引いた中に一人元気で張切っていました。その日は飛行機で福州へ飛ぶ筈でしたが、突然汽車の旅になり一日かかって福州へ到着（こういう事は中国旅行では当たり前のように起っている）。福州は唐招提寺を創建した鑑真和尚が船出をしたといわれる地である。

一月二日 「田黄」それは書家にとって聞いただけで涎の出そうな印材です。今日はその石をこの手で採石しようというのです。福州郊外の寿山へバスで出発。ここも最近解放されたところで日本人の見学は初めてだそうです。寿山は杜陵坑、高山坑、水坑等々印材の産地でその山へ登る途中に田黄石があるということ。着いて見ると文字通り田んぼの中です。その田の中を流れている細い浅い川の川原に下りて採石女工さんに見じて田黄を探しましたが仲間を見つかりません。それもその筈、今では一日に一個有るか無いかという事です。遙か上流の山中より流れてくるという事です。雨期などにはあるのではないかと思えます。それでもやっと思指の爪程の田黄石を拾い大満足で川から上り又バスにゆられて寿山の山頂へむかい高山石の坑を見学しました。といつてもこの石はとも柔らかく坑の中は素人が入るのは危険ということで入口からのぞいただけ。その附近にころがっている石をビニール袋一杯拾って下山しました（帰国してから沢山印材を造りお土産にしました）。その夜は福州のホテルにて、この地で高名な篆刻家の篆刻の実演を見せて貰い記念に雅印を一顆彫っていただきうれしさに胸をふくらませて就寝、明ければ

一月三日 空路広州へ。昼頃広州に到着。早速文物店を一軒のぞき

バスで西方の肇慶へ。ここは今回の旅行のメイン、いよいよ待望の端溪見学です。着いた芙蓉賓館では劉演良先生（端溪の採出の総監督で肇慶市工艺美术工業会社の社長）と黎鑑先生（作硯で人間国宝級の方）が恐れ多くも私共を待って出迎えて下さいました。その晩は肇慶市長や上記両先生の歓迎パーティがあり翌日の端溪見学に胸おどらせ乍ら就寝。



西江

一月四日 端溪といえは硯の代名詞のようになっていますが実は地名です。広東省肇慶府高要県に流れる西江の支流の小溪流で斧柯山という山のふもと一帯の事です。この溪流にそって硯坑があり水巖坑と称し絶品と言われる名石が産出されます。その水巖坑を中心とした左右の山に沢山の坑が開かれています。以上を総称して端溪硯といわれています。この硯石は中国の文化が大きく花開いた唐時代の初頃より採石されたと言われており、唐の文人も端溪硯を持つことを大いに誇りとしていたそうです。この硯がどのように良いのかということはいずれにも大きな課題で私共がとてと述べる事は出来ません。この団の団長先生（相浦紫瑞）の御研究による御著書が色々出版されていますので御一読下さい。

の景色はすぐく雄大で日本で見られないような素晴らしい。舟着場へ到着の後けわしい山道を杖を借りてあえぎあえぎ登りつめた所に端溪への門がある。この附近は今でも人家はなく開坑当時は前人未踏の山中で夜など虎が出るので人夫は山を下り舟で宿泊していたといわれる様なところで、よくもまあこんな所にこんな名石を発見したものだ。古人の偉大さに頭が下がります。門から一番近いところに老坑があります。現在中国から輸入されている端溪硯は殆どが新端溪です。之に対し古端溪という唐より清時代にかけて採石されたものがあります。この古端が垂涎の的の硯石で現在ではもう掘りつくしてありませんので値段も高く稀小価値の高い骨董美術品となっています。この古端を採石していたところがこの老坑です。ここから百米位登った所に現在採石され



端溪の硯

ている水巖坑がありました。劉先生の特別のお計らいにより入坑させていただきました。縦坑なのでお尻を地面につけすべり台を下りる様に三十米ばかり坑道をすべり下りるとそこに採石現場がありました。二十畳敷位の平地があり、その周囲で坑夫が鑿をふるっている。早速私達も持参の鑿で一寸だけ掘らせてもらったその岩肌の感触は今でも忘れることは出来ません。掘った石はトロッコで地上に上げ入口で検査官がよい石を選別するのですが、私共が見ていた三十分位の間に一片の石も選出されませんでした。そこで選外の石の捨て場にトロッコからうつつされた石が山の様に積んである中から又々何個かの石を拾い持ち帰りました（帰路空港で荷物の超過料を二万四千円もとられました）。そこから又敷キロ位先の麻子坑



女工さんの手仕事

へ。ここは高い山の中腹に登るのに時間がかかるため一つ手前の山より遙かに坑口を見ただけで引きかえし坑仔岩を見学し山を下り舟上の人となって肇慶市内へ帰着。今度は劉先生が工場長をしておられる作硯工場を見学に行きました。沢山の女工さんが彫ったり、磨いたりを流れ作業でやっています。全部手仕事でその器用さに時間も忘れてうっとり見とれていました。その晩は昨晩のお礼にとこちらの団より上記先生方を招待しての夕食会があり、その先生御持参の良硯を一つずつお土産にいただきました。感激!!（日本で買えば十倍以上の品）。

一月五日 昨日とは川をはさんで西側の北嶺へ登る。途中七星巖という景色のよいところを眺め乍らその裏側へ。ここにも色々な坑が開削されていたが有名な宗坑のみ見学し下山。肇慶市端溪廠という

ところで市長さん方の歓迎を受け素晴らしいの一語につきる硯の色々見せてもらった。夕刻よりバスにて広州へ向いホテルに一泊。その晩、免税店へ買物に出かけたが一人はぐれてしまい、とても心細かったけれど、ああここは漢字の国だという事を思いつきメモ紙に白雲館と書いて通行人に見せると指さして方角を教えてください。何人かに尋ねホテルに着いた時は本当にホッとしました。之が英語の国であつたら如何なっていたらや？

一月六日 列車にて国境を越え香港へ。ここでは只ひたすらに骨董屋巡り荷李活路という道路の両側に三十五軒の古文物店が並んでいる。そこを自由行動にて軒別に見て歩いたが悲しい事に目の効かない私は人の買物を横目でみるばかりでした。明時代の辰砂の水筒、清朝の象牙の大きな筆筒など初めてお目にかかった様な物を求めた人もいました。でも之だけ沢山の骨董屋さんの中に古端溪の硯が一面も見つからないのは残念なことでした。殆ど台湾を経て日本にいつてしまったということです。晩は香港名物の船上レストランでお別れパーティ、海鮮料理に舌鼓を打ち百万弗の夜景を眺めてこの旅行も無事に終わりました。香港の空港では全員が超過料金を払いました。只で拾った石もかなり高額なものとなったようです。

若松恵比須神社から高塔山へ

若松区 森川 政美

江戸時代、博多、筑豊方面から恵比須講の団体参拝で賑ったと言う若松恵比須神社は、明治中期までは海岸であったが其の後埋め立てられて街の中央、若戸大橋沿いにある。緑の樹木に囲まれている本殿は大正十三年の再建で、大正頃までは境内うっそうとした大木に覆われていた。主神は事代主神、社伝によれば、神功皇后此地に上陸の際神像石が海底から引上げられたので、これを御神体にしたとあり、棟札に慶長九年修造など現存し、春と秋の大祭には遠くから参拝があり、若松の「おゑべっさん」と親しまれている。

東の鳥居（鳥居）神社東側石鳥居は安永九年（一七八〇）若松船手支配の安川慶治が寄進したもので、当時の附近は小松ヶ浦の海岸で響灘の波が打ちよせていた。この沖を修多羅の福岡藩米蔵から貢米を満積した七百石—千石級の船が帆を張って航行していた、行く先は大坂中の島にある筑前蔵屋敷である。黒崎から出港した秋月藩の御座船は、朱塗で屋形造り、御直の時は鳥毛を船に立て、太鼓を合図に加子調子を合せて漕ぐ様は美事であったという。洞海の漁船も盛に出入りしたものであろう。それ

等の航行する船から見える様に鳥居の東面に大きく銘文が彫り込まれている。

「日本之西朝鮮之東石門表海艇子之宮昔者樟舟乗波順風斯降紫陽垂福無窮」

この三十二字の銘文は福岡藩の儒者亀井南冥撰といわれ、藩の最北端を守る海の玄関口であり、海上交通の重要な位置である事を示し気宇の大きさが感ぜられる。

日本の西、朝鮮の東、石門海に表す艇子宮、昔は樟舟、波に乗り風にしがたい、ここ紫陽に降りし、福を垂るは窮り無し、

①樟舟とは日本神話の中で高天原から建御雷の神に伴って出雲の国に下りた、鳥の石楠船の神、ここでは神の便船のごとき古代の船という意味であらう。

②紫陽（紫陽）上井寛兼日記に天正十三年二月八日、京都五山衆紫陽へ御下向候とあり、筑紫のおもて博多の雅名だが、ここでは筑前の表にとっているのではないだろうか。

この銘文の大意は左の通りである。この石の鳥居は日本の西、朝鮮の東に位置し、それ等に通づる海の表に面する艇子の宮に建てられ

ている。上古神代の鳥の石楠舟の昔より各地から産物が荒波を乗り越え、風にしがたい、この紫陽の地に荷を降し国民の福を招いた。幾久しく無窮にこの神の恵は続くことだろう。

（浅学ながら解いてみたが銘文の真意は計り難い）

力石（力石）拜殿左手にあり、文久三年中ノ島若松砲台構築に力士を募って勇力隊というものがあつた。隊長は福岡藩の砲術方八尋清五郎で頑強に衆を威圧した。その力士隊が武運長久を祈り石を神社に寄進したもので表に元治年間力士隊中奉納、力石とある。

方位石（方位石）拜殿左にあり、六角形台座（下段はのちに補足）の上に凹形二段があり、最上段が東西南北及び十二支を刻んだ方位盤となっている。花崗岩製で昔は磁石石と言ったようで神社の東海岸にあつた。海上交通安全の祈願のため奉納されたものであろう。

日本全国で十数基しか確認されていないが、社伝によれば伊能忠敬が幕命により文化九年（一八一二）若松地方を海陸二手に分れて測量、その際方位石を神社に奉納されたというが確たる資料が残っていないので、市の説明板には伊能忠敬云々は記されていない。

常夜燈（常夜燈）神社東北の角にある石の常夜燈は現在街の中になつてい

るが、昔は石段があつてすぐ下は響灘の波が打ちよせていた。船からの参拝者はここから上陸したという。この横を貢米船が米俵を満載帆を張って大阪に向つて出港、その出船入船の目印となつたのがこの恵比須神社の常夜燈である。

秋月御手船中、若松町中、同所船中、焚石積旅船中、黒崎船中、外に世話人の名前が下手にびつしり刻込んである。如何に多くの人が航海安全を神に祈つていたかが判る。

明治廿五年頃の若松町



近（近）に居を構え羽振りをきかせていた麻生兄弟は彼を丁寧に迎え、とある寺院に案内した。このとある寺院とは二百米ばかり南の正保寺公園の地であらうといわれている。「塩屋のけむり夕陽を受け真赤に染り絶景いわん方なしと宗祇はひびきをたいて喜んだ」その夜盃を重ねて、

名や思うこよいしぐれぬ秋の月の一句を残した。この碑は前若松区文化協会会長久保田瑞一氏、版画家片山正信氏外有志が昭和四十六年十月建立した。石は耶馬溪産、文字は宗祇の書からとったと云う。

高塔山大庭隠岐守碑（高塔山大庭隠岐守碑）山頂河童地蔵北側下樹林の中にあり。隠岐守の子孫である大庭福松が、明治三十八年九月自宅庭に建立したが、その後家運がかたむき他地区に転出、碑は四個に割られて放置されていたのを戦後修復し現在地に建てられた。

河童地蔵（河童地蔵）高塔山山頂コンクリート製堂の中にある等身大坐像石仏、火野葦平の石と釘で有名になつたが、実は高塔山城の守護仏で虚空蔵菩薩、背に打ち込まれた舟釘は昭和二十八年何者かに盗まれ現在の新しいものである。土地の人は、この地蔵に因んで高塔山を大正の頃まで国蔵山と呼んでいた。

葦平は此の高塔山をこよなく愛

し、此の山頂から眺める夜景は東洋のナポリ百万ドルの夜景と文人諸氏を伴つてよく登つた。亡くなつた時、彼の骨灰は此のキャパ堂からまかれた、彼の遺言であつた。因に彼の亡くなったのは一月二十四日、高塔山の標高一二四米、不思議な一致である。

高塔山公園碑（高塔山公園碑）山頂西側公園入口にあり、この碑は戦前建立されたもので最初「三勇士之碑」と刻まれていた。昭和六年七月久留米工兵隊が三日間で高塔山道路（一、二〇〇米）を造り、その年の九月満州事変が勃発した。廟行鎮で敵の鉄条網を体ごと爆破した肉弾三勇士、江下、北川、作江は此の作業に参加した兵士であつたので、市では早速ゆかりの高塔山に碑を建立した。戦後昭和三十三年碑面を「高塔山公園」と改めた。撰文は玉井政雄氏、建立は当時の若松市長吉田敬太郎氏。

吉田磯吉像（吉田磯吉像）磯吉氏は慶応二年

芦屋に生れる。貧家に育ち川船の船頭をしていたが俠気があつて、もつれ話しの仲介をして九州一円の大親分と言われた様になつた。大正四年衆議院議員に選ばれたが、若松市の発展の為に貢献のあった人で、特に牧山浄水場決壊事件で旭ガラスから若松市に五十万円の損害賠償を請求された。當時市の年間予算三十万、驚いた市は吉田代議士に泣きついた。氏は



銘文のある若松恵比須神社東の鳥居

旭ガラス三菱本社を訪れ「済まなかつた」と謝罪、その誠意を認め三菱は「弁償は必要ない」と五十万円の訴訟を取り下げた。氏は昭和十一年一月病没七十才、葬儀参列二万人、えんえん二キロにわたつた。銅像は山頂西側丘の上にある洞海湾を見下す磯吉翁の姿で製作者は日本彫刻界の泰斗佐藤忠良氏で、昭和三十五年五月建立された。

仏舍利塔（仏舍利塔）昭和三十七年九月、市民の浄財で建立、中に納められているのはインド政府からはる贈られた釈迦の分骨である。この地は戦時中、高塔山高射砲隊陣地で、展望台に六門、運動広場に六門、仏舍利塔に六門の高射砲があり、三個中隊四五〇人が配置されていた。

昭和十九年六月十六日、アメリカ空軍機の北九州初空襲で、高射

砲隊は一ヶ年分の砲弾を一夜で撃ち尽し軍司令部から大目玉を食つた。その夜の戦いで秋吉少尉以下十二名の将兵が壮烈な戦死を遂げた。七月二十日西部第八〇六一部隊の合同葬がしめやかに行われた。この下手に兵舎が数棟あつたが現在一棟残っている。

火野葦平文学碑（火野葦平文学碑）高塔山南面台地に昭和三十五年八月一日建立
台石（台石）高知産青玉石
淵石（淵石）徳山産御影石
段石（段石）兵庫産並木石
脚台石（脚台石）スウェーデン赤御影石
碑石（碑石）福島産浮金石

正に銘石で構成する石の芸術品である。碑下に選集八巻、万年筆、へその緒など埋蔵されている。

泥によごれし背囊に
さす一輪の菊の香や
（異国の道を行く兵の
眼にしむ空の青の色）

と葦平の四行詩の前半が刻んであり、尋ねる人の心にふれる。毎年一月の命日に近い日曜日、葦平ゆかりの人々が集り、碑に菊を供え尺八を奏し、表と兵隊の歌を合唱、先生の冥福を祈っている。

安養寺（安養寺）浄土宗修多羅山安養寺と称し開創は永祿元年（一五五八）大庭隠岐守開基、行蓮社念上人行明大和尚を開山とする。

大庭隠岐守碑（大庭隠岐守碑）安養寺門を入りすぐ右側にあり、表に「大庭隠岐

守景種之碑」とあり、安養寺二十七七世塩次一正任職再建、黒田長成侯爵の筆になる。何故か、景種を種景と誤記されている。

玉井家墓（玉井家墓）安養寺境内墓地にあり、火野葦平の父玉井金五郎、母マン、葦平氏夫妻が眠っている。
玉井勝則 昭和三十五年一月廿四日卒 五十四才
ヨシノ 昭和四十八年一月廿四日卒 五十九才

火野葦平のペンネームは奥さんの日野ヨシノから取つたもので、初め火野葦平と言つたが、ヨシもアシも同字だと葦平に決めたそうで如何に彼女を愛していたか推察される。奇しくも没年は違つたが月日は同じ一月廿四日である。

三河童の碑（三河童の碑）安養寺門を入つて左側にあり。三河童の表情が面白い。

眼鏡（眼鏡）として盲目に似たり
敏き耳（敏き耳）豈聾者に及ばん
不如不語不見不聞

河伯洞（河伯洞）白山一丁目一六一にあり葦平が出征中、父玉井金五郎が兵隊三部作の印税で建てたもので「兵隊たちが戦地で闘つている時に、かかる印税で家を建てる」とは「戦後増築し、二階を書斎とし河伯洞と称した。ここから多くの作品が生れた。昭和三十五年一月廿四日この書斎で自ら命を絶つた。

